

調査研究事業

ウェブサイト 読み物・連載

ピティナのウェブサイトでは、作曲家・作品研究から国際コンクールのレポートに至るまで、他分野にわたる情報を様々な切り口で提供・集約し続けています。
4～6月に更新された記事内容をピックアップしてご紹介します。

第14回

ヴァン・クライバーン 国際コンクールレポート

取材・文：菅野恵理子（研究会員）

第14回ヴァン・クライバーン国際コンクールが米テキサス州フォートワース市にて、5月24日

～6月9日の17日間に渡り開催されました。全世界から30名の精鋭が参加し、華麗なる競演が繰り広げられました。日本からは1名、最年少出場者となる阪田知樹さん（19歳／2011年度ピティナ特級グランプリ、2009年度福田

靖子賞）が参加しました。予選はソロ45分×2回、セミファイナルはソロ60分と室内楽1曲（ピアノ五重奏、共演：ブレンターノ弦楽四重奏団）、ファイナルは協奏曲2曲（共演：フォートワース交響楽団、レナード・スラットキン指揮）。世界屈指の分量の多さですが、あらゆる角度から音楽家としての才能と力量をはかる、バランス良い課題といえるでしょう。中でもソロは新曲課題曲以外全てフリープログラム



6名のファイナリストたち

で、演奏解釈のみならず、プログラムの組み方にも随所に個性がみられました。高いレベルの競演に、会場に集まった聴衆のみならず、世界同時配信されたライブ中継でも大いに盛り上がりを見せました。最終結果はワディム・ホロデンコ氏（ウクライナ）が優勝、日本の阪田知樹さんも堂々としたステージでファイナリストとなりました。

国際コンクールでは世界各国におけるピアノ指導の最先端を垣間見ることができ、今回は「今後に生かしたいポイント」として次の5点を挙げました。

（1）曲を主体的に選ぶこと（2）曲の全体像から文脈を見出し、音を探ること（3）ソロ以外の勉強を広げること（4）言語コミュニケーションも増やすこと（5）グローバル化を上手に活かすこと。

（2）に関して、音の色彩・質感・表情・ニュアンスなどは曲全体の文脈から導き出すことができますが、そうした音創りの意識は近年とても高まっていると感じます。また（3）は、最近ピアノソロ以外に室内楽・作曲・指揮などを勉強するピ

1400名のボランティアが活躍！写真のバトリシアさんは1966年からコンクールに通い続け、現在はボランティア、パトロンとして運営を支えている



地元学生がデザインした44枚の旗が街中に。



ナボレ先生、お母様、陽気なホストファミリーの皆さんと阪田知樹さん

アニストが増えており、より総合的な音楽の学びが進んでいる印象を持ちました。

ところでヴァン・クライバーンといえば、1958年第1回チャイコフスキー国際コンクールで優勝を遂げ、緊迫していた東西陣営間に新たな芸術文化交流のきっかけをもたらした時代の寵児でした。今年2月に惜しくも亡くなりましたが、最終日の受賞式では在りし日の映像が流され、氏が残した偉大な芸術遺産にあらためて思いを馳せつつ、第14回大会は盛大に幕を閉じました。



タンゲルウッド音楽祭のボランティアは約800人。2010～2011年度シーズンは計24,000時間の貢献があったそうだ。

アメリカでは、 なぜ音楽に 民間支援がつくのか？

取材・文：菅野恵理子（研究員）

「誰が文化を創るのか、誰が文化を支えるのか」。日本ではこれまで国家が文化保護・普及政策に関して大きな役割を果たしてきました。しかし昨今の文化予算を取り巻く状況は必ずしも楽観視できるものではないこと、また民間支援も積極的に求めていく機運が高まっていることを踏まえ、今後のヒントとなるべくアメリカの音楽業界におけるファンドレイジング（資金調

達）について取材しました。アメリカでは年間20兆円以上の寄付が文化芸術団体に集まっていますが、それは単に「寄付文化があるから」というより、創意工夫に満ちたフィランソロピー教育と実践体験の積み重ねによって社会に根づいてきたのでした。たとえば1960年代の文化予算大幅削減によって、公立小中学校では音楽の授業が大幅に減らされてしまいましたが、それに対して多くの母親や地域の音楽家が音楽の必要性を訴えかけたり、自ら寄付を募って活動資金を得ながら、学校に音楽の時間を取り戻す努力を重ねました。そのボランティア活動が発展し、今では地域全体の音楽文化普及に貢献している団体もあります。「自分が所属するコミュニティ＝自分たちの未来のため」という使命感が、その原点にあったのです。

最近ではオーケストラやホールなどの音楽芸術団体も、一部の篤志家や音楽愛好者だけでなく、広く地域コミュニティによって支えられているという意識を強く持つよ



ダラス交響楽団では10代学生で結成されるティーンズ・カウンシルが、毎年1回コンサートを企画・運営している。
(C) Dallas Symphony Orchestra



デトロイト交響楽団のコンサート会場では、休憩時間に支援者同士のネットワーキングパーティーが行われる。中には学生や子供の姿も。彼らも未来の支援者となるか！？

く、お互いの目標達成のためのパートナーとして手を組むなど、より発展的な関係へと変化しているようです。

文化を創るのも、支えるのも、次世代を育てるのもコミュニティ。さらにSNS（ソーシャル・ネットワーク）の普及は、地域を超えてまた新しいコミュニティを築くきっかけを与えてくれています。最近日本でも民間によるNPO支援が広まりつつありますが、音楽と関わってよかった、支援してよかったという満たされた気持ちは、人から人へ伝わり、未来を変える力になっていくでしょう。アメリカの事例が、日本でも参考になれば幸いです



ラヴィニア音楽祭が地元小学校と組んだ「Music Discovery」プログラム。小学生が音楽を聴いてアート作品を仕上げた

日々雑感 「レッスン現場で 思うこと」

文・大竹道哉（正会員）



大竹道哉先生による
短期連載「日々雑
感」を読み物・連載
コーナーに6回、掲載しました。
facebook上で多くの指導者から共
感を得ていた記事を、大竹先生に
再編して頂いたものです。

第一回：「自由」とは？

音楽の中の「自由」とは何か？
それは「音」が「自由」だといふこ
と。「自由」でないとは「何かの束縛
を受けている」ということです。音
も束縛を受けます。「音」の行きた
い方をよく観察して意を汲むこと
が「音を自由にすること」ではない
かと思います。その積み重ねの先
に「音楽」があります。

第二回：調には特徴がある

わざわざ調号が多くて譜読みし
にくい調で曲を作る理由は、その

調ならではの特徴（キャラクター）
があるから。では、その調固有のキヤ
ラクターが形作られる理由とは？
その理由を丹念に見ていくことか
ら、演奏が変わります。

第三回：「間違い」を生かす

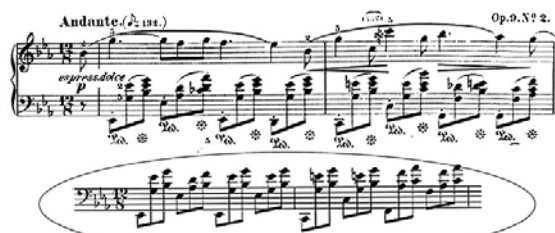
間違いは3種類あります。
一、直さなくてもいいもの
二、音楽の進行上おかしくない
が、作曲家の特有のハーモニー
や流れを無視しているもの
三、明らかに音楽の進行上そのよ
うな音が来るわけがないもの

一はごく稀。問題は二と三です。
ハーモニーとしてはおかしくなくとも
「ショパンのこだわり」が消えて
しまうということがあります（譜例
1）。間違った生徒とともに「直し
た音を大切に弾き」「一緒に味わう」
ことで「芸術作品の素晴らしさ」に
触れることになります。

第四回：曲の出だしから 「休符を考える」

休符にも「強弱やキャラクター」
を感じることができます。現実

譜例 1



ハーモニーとしてはおかしくないかもしれないが...

譜例 2



想像の音 現実の音

上手いかないもの
が、もう片手のやさ
しいパートに意識を
向けたとたん、「ま
とまった」演奏にな
ることがあります。

第六回： ピアノで「歌う」 ことについて

レッスン現場で
よく言われる「歌い
なさい！」という言
葉。ではピアノで歌

響く「音」は、すべての音のうちの
氷山の一角、水面上に出ているもの
だと考えてみてはどうでしょうか。
例としてショパンのバラード二番冒
頭を思い起こしてみてください（譜
例2）。

第五回：意識を移す

「注意をどこに向けるか」という
コントロールを行うことで困難を
克服することができます。どち
らかの手に難しいパッセージがある
とき、懸命に練習してもなかなか

うとはどのような状態なのか？ピ
アノは「機構的には打楽器（手の延
長）」「使われ方としては弦楽器や管
楽器（声の延長）」だと考えられま
す。音に集中し「音が膨らみ空中に
漂う」のをイメージすることで、音
楽に「生命」が宿ります。

本連載は今後再開・継続も検討
中です。